

倫理経営のすすめ 目次

プロローグ…… 9

日本はこのまま壊れていくのか?…… 9

失くしたカギを外で探す人／情報化が進むほど「人徳」が求められる／
「徳」の力は必ず人を魅了する

第1章 「倫理」を知ることが成功への第一歩…… 19

日本に起こった「まじめの崩壊」…… 20

なぜあのおとなしい子がこんなことを／なにが「善」で、なにが「悪」か／そ
れは頑固オヤジの消滅とともに始まった／正直者は本当にバカをみるのか

だれにでも通じる倫理はあるのか…… 33

なぜ忠臣蔵の人気は衰えないのか／「価値相対主義」という魔物／フラン

クリンが立てた十二の徳目

日本は倫理の先進国だった…… 42

「清く明るく」が日本の倫理の原点／「正直」より「儉約」「勤勉」が優先の西洋

「倫理」はものごとを繁栄させる基礎…… 49

儲けを追求する企業ほど儲けられない／倫理規定は経営理念に通ずる／

「経営倫理」と「倫理経営」はちがう

第2章 倫理経営を实践すれば必ず成功する…… 59

「才」は「徳」に及ばない…… 60

経営とは社長だけがやるものではない／「経」というタテ軸と「営」というヨ

コ軸／井深大の含蓄ある言葉

渋沢栄一の驚くべき業績…… 67

風雲急を告げた時代／フランス留学で実業家に目覚める／日本を資本主義の国にしてみせる

第3章

幸せになる法則を発見した人 丸山敏雄…… 101

「実験」で確かめられた生活法則…… 102

道徳の是非は試してみなければわからない／守ればだれでも幸福になれる
生活法則／道徳と幸福の因果関係がわかった

純情(すなお)な人はうまくいく…… 112

「十七カ条」が教えていること／人が本来もって生まれた自然な心

あのドラッカーも賞賛した渋沢の倫理経営…… 76

『論語』こそ日本人のバイブルだ／道徳の上にソロバンを置け／人は何のためにこの世に生まれてくるのか／西欧のものまねでない倫理経営

使命感のある人こそ「経営者」の名に値する…… 90

「使命感」と「悟り」は似ている／目隠しをしたまま歩いていないか／寅さんの生きがいは

純粹倫理はここが違う…… 121

「正しい人は病気になる」は本当か／人には見えない「結びつき」がある
／宗教と通ずるものはあるが、宗教ではない

第4章 — この法則に気づくと人生は面白くなる…… 131

苦痛が苦痛と感じなくなるとき…… 132

激しい拷問の末に／苦痛が苦痛でなくなった！

苦しみよ、ありがとう…… 138

どんな苦難も必ず自分で解決できる／苦難はその人を助けるためにやって
くる／日常の出来事にはすべて意味がある／「人生の意味」は問うもので
なく、答えを出すもの

なにが起こっても「これがよい」と受けとめよう…… 147

わがままな人は多くの苦難に見舞われる／ガン細胞は異常でも不健全でも
ない／苦しみを乗りこえる魔法の言葉／プラス思考など必要ない

第5章 — 小さなことから奇跡は起きる …… 159

複雑系の知恵を活かそう …… 160

経営不振で自殺を考えた男 / この世は複雑系でできている / 小さな変化
が大きな変化をよび起こす / 「ハイ」という返事ひとつでその人の技量がわ
かる / 「黒い羊」を追い出すな / 「ノーダルポイント」を突くとみるみる変
化が起こる / 「小さなこと」は勝敗をも支配する

家庭のちからが企業を支える …… 178

「家庭と仕事は別」は大きな誤解 / 理解する前に「ハイ！」と言おう / 親が
変われば子が変わる / 「子の親」になる前に「親の子」になる / みんな祖先
とつながっている

物もお金もみんな生きています …… 191

なぜ孤独感を感じてしまうのか / 鉄の棒だって生きています / 機械や道具
は生かしてくれる人に感応する / お金という生き物の性分を知ろう

第6章 「仕事」「喜び」になるこの考え方…… 203

動けば出会いがあり、変化が起こる…… 204

かかるとなかなか治らない「せい病」／どうしたら「明るい人」になれるのか
／朝を制した人が幸福になる

「錯覚だらけの人生」とさようなら…… 214

固定観念や思い込みにとらわれていないか／もう「錯覚の人生」はやめよう
／論理療法が教えてくれるもの／「持つことが幸福」は大きな錯覚

「労働」を「喜び」に変える方法…… 231

マッカーサーが驚いたこと／どんな仕事も本来は楽しいもの／「喜び」こそ仕事の最大の報酬／熱意があると、見えないものまで見えてくる／だれでも愛のある会社で働きたい

プロローグ

日本はこのまま壊れていくのか？

日本の長い歴史の中で、一九八九年は大きな節目となる年だった。

昭和天皇が崩御され、元号が「平成」と変わったのが、その年の松飾りも取れない一月七日である。以後、日本は平らかに成るところか、茨の道を歩き始める。

元号が変わった時節に呼応するかのようには、そののちの世界と日本で三つの崩壊現象が起こった。ベルリンの壁の崩壊、旧ソ連の崩壊、そして泡沫^{バブル}経済の崩壊である。三つの崩壊が与えた影響はすさまじい。世界は「ポスト冷戦^{カオス}」と呼ばれる混沌の時代に突入した。日本も、混沌の海への漂流を余儀なくされる。

昭和の大戦後の経済復興から効果的に機能した官僚主導型のシステムは、制度疲労に襲われ

て閉塞状況に陥った。経済大国になる目標を実現していくなかで、公益の陰にかくれて私益を追求してきた政財官の不祥事が、次々に明るみに出た。

旧大蔵省は解体のやむなきに至り、しかしながら経済の再建は一向に進まない。倒産とリストラの不安に国民はおびえ、政治家への信頼などとうの昔に消え失せている。

大きな不安を抱き、目標を見失った国民に、活力や志気を求めても難しい。高齢化と少子化は広がり、若者たちの眼から輝きは失せつつある。年間の自殺者は、九八年から三万人を越すようになった。精神を病む人々も増えている。弱体化するこの国につけ入るように、外国人による凶悪犯罪まで多発してきた。

各種の領域でモラルの荒廃が目立つようになった。日本の崩壊現象は、バブル経済のみならず、教育や家庭の崩壊にまで及んでいる。まるで日本という体に、ガン細胞が急激に増殖しつつあるかのようだ。

ガンが恐ろしいのは、静かに進行し、発見されたときには手遅れという場合が少なくないことである。ガン細胞も元々は正常な細胞なのだが、なにかの原因で悪性化し、異常に増殖してしまう。

現代の日本人を蝕む病の本質は、その肉体よりも精神のありようにこそある。

伝統の中で培われた健全な精神性が歪められ、貶められて、モラルなき世の中と化しつつあることだ。独立国としての気概も乏しく、伝統の文化や倫理観を尊重しないような国民、いや、そうさせられてしまった国民。唯一許された工業化への道を猪突猛進し、「世界の工場」の役割を果たし、それなりの物質的な豊かさを享受した国民のなれの果てを、今日の日本人の姿は示している。豊かさを求めた代償が、自殺の増加やモラルの荒廃であってよいはずがないのに。

失くしたカギを外で探す人

イスラム教には密教に当たるスーフイーという宗派がある。そこでは次のような例話が伝えられてきたという。

主人公はナースイル・ウツデイーンという変わった名前の男だ。ナースイルとは利口者、ウツデイーンとは愚か者を意味する。まことに奇妙な名前だが、その名前の由来を物語る出来事があった。

あるとき、ナースイル・ウツデイーンが家の周りの地面を這い廻って、なにかを懸命に探していた。通りかかった知人が尋ねた。

「おーい、君はさつきから何を探しているんだね？」

「うん、大事なカギをなくしちゃってね」

知人は気の毒に思い、一緒に探してやったが見つからない。知人はまた尋ねた。

「もう一度よく思い出してみろよ。君はそのカギをどのあたりに落としたんだい？」

「いや、それはわかってるんだ、家の中なんだよ」

「なんだバカバカしい。家の中で落としたのに、どうして君は外で探してるんだ」

「いやなに、家の中は暗いじゃないか。外の方がずっと明るくて探しやすいだろう」

知人は開いた口がふさがらなかつた――。

明るい所の方が失くし物は探しやすい。それは賢明な選択だ。しかし大切なカギを落とした所がそもそも違う。笑い話のようだが、しかしこの男のことを笑えるだろうか。「大切なものは内にあるのに、外にばかり目を向けて探し廻っているのではないか」という教訓は、現代の日本人にピタリと通じる。

効率優先の超スピード時代になると、情報を求めて人の目は外にばかり向く。欲求充足のエイズム社会に身を置いてみると、刺激を求めて外にばかり出たがる。経営が苦しくなると、インスタントなノウハウを得たいと外に求めようとする。いつもなにかに追い立てられ、駆り立てられ、不安から逃れられない現代人の姿がそこにある。